

女の一生

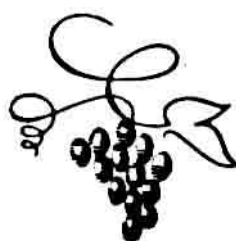
(下)

山本有三

おんな 女 の 一 いつ しょう 生 (下)

新潮文庫

草 60 = 3



昭和二十六年三月二十六日 発行
昭和五十七年十一月三十日 六十三刷

著 者 山 本 有 三
やまもと ゆうぞう

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵便 番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六一五一
編集部(〇三)二六六一五四四〇
振替 東京四一八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

⊙ 印刷・株式会社金羊社 製本・憲專堂製本株式会社

© Yûichi Yamamoto 1951 Printed in Japan

ISBN4-10-106004-5 C0193

新 潮 文 庫

女 の 一 生
下 卷

山 本 有 三 著



新 潮 社 版

目次

私生児	七
町医者	二五
離合	七一
メデイシンボール	二五
どっちもいゝと答えけるかな	一五三
真実一路	一八一
恋愛	二〇二
母の愛	二五六
第二の出産	三〇八

解説 高橋健二

女の一生 第二部

私 生 児

一

允子は看護婦に「純一」と書いてもらった。

たいへんいゝ名まえのようでもあるが、なんだかぴったりしないようでもあった。彼女はしばらく考えていたが、その横に「一彦」(カズヒコ)と書いてもらった。さらに「正樹」(マサキ)と書いてもらった。

彼女はまたしばらく考えていたが、今度は「マサオ」といった。「マサオ」の「マサ」は允子の允で、「オ」は男という字がいゝだろうといった。

看護婦に書いてもらった紙を允子はベッドの上に横たわりながら、じつとながめていた。どの名もそんなに悪くないように思われるが、どれにしてもいゝか、なか／＼定めかねた。赤ん坊の名まえは生まれる前から、男だったら、こういう名まえ、女だったら、こういう名まえなぞと、いくつか考えるには考えておいたのだけれど、さて実際につけるとなると、すぐにはきめられなかった。彼女はふと横に寝ている赤ん坊を見た。赤ん坊はあたまにマワタをかぶって、すや／＼眠っていた。

赤ん坊の顔を見ると、なお名まえがつけにくかった。今は赤い、ちいさな肉塊にしか過ぎないけれど、この子が将来どんなふうに成長して行くのかと思うと、彼女はいゝ加減な名まえをつけ

ることがこわかった。

「どうしたい。だいぶひ、だちがい、そうだね。」

大介がドアをあけて、はいってきた。兄に会うのはヨコハマでおこられて以来、はじめてだった。

「どうもいろく……」

允子はこのあいだの金のことや、いろくの意味をこめて、少しからだを起き返らせながらいった。

「いや、寝てなくちゃいけない。寝ていなくっちゃ……」

と兄は制した。雑談のあいだに、允子は子どもの名まえを考えているんだけど、なか／＼い名まえがつかないといった。

「うム、名まえか、名まえは、考えだしたらきりがないよ。そんなものは符帳なんだから、い、加減のところで、きめちまうんだね。」

と、兄はいつもの兄らしいことをいった。

「ところで、きょう、おれがきたのは、……」

彼は語りだしたが、ふと、そばにいる看護婦に気がついたので、しばらくその場をはずしてもらった。そして続けた。

「今の名まえに関係のあることなんだが、届のほうはどうする。」

「届って——赤ん坊の戸籍ですか。」

「そうだ。そのことについて相談にきたのだ。——どうだい。おれんとこに、籍を入れておいちゃ……」

「そうすると、にいきんの子どもということにするんですか。」

「うム、形だけはな。」

「だってそんなこと。ねえさんに……」

「いや、あれはどうにだってなる。そのほうの心配はいらないよ。」

「……………」

「おれはいろ／＼考えたんだが、そうしたほうがよかないかい。赤ん坊のためにも、おまえのためにも。そのほうがおまえも働いきいし、第一、戸籍の上で暗いものをしよわせるのは、ちいさい者にかわいそうだと思うんだ。」

兄は声を落としていった。

二

允子はしばらく返事ができなかった。

兄は平生ごくのんきなたちで、なんでもやりっぱなしだが、少しちゃんとした事になると、案外きちんとしていた。いつかはあんなにおこったのに、その赤ん坊のことで、こんなに気をつかってくれるのかと思うと、允子は思わず涙ぐんだ。

「おい、どうする。」

と、兄は催促するようにいった。

「おれは、そのほうがいゝと思うんだがな。」

「……………」

「なんだ。おまえ泣いているのかい。」

「いゝえ。」

允子はかけぶとんのはしに目を押しつけてしまった。

「おれはそんなつもりで話したんじゃないんだがな。おまえ、おれのいうことを、勘ちがいしているわけじゃないだろうな。」

「いゝえ、よくわかっています。よくわかっているから、つい涙が出てしまつて……………」

彼女は涙をふきながら続けた。

「にいさんからそういう話をされると、あたし、ほんとうに、自分が悪かったとしみぐゝ思いますわ。」

「何をいつているんだ、つまらない。」

「いゝえ、ほんと。おこられたり何かした時は、かえって反抗したくなるんですけれど、こういう話をされると、あたし、すぐ弱くなつてしまうの。」

「そんなことはどうでもいい、が、籍はどうする。」

「そうですね、自分では、どこまでも自分の子として育てて行くつもりでいたんですけれど……………」
「だから育てるのは、おまえが自分のすきなように育てるとして、籍だけそうしておいたほうが、

子どものためによかないかい。おれのところなら、なんにも問題は起こりゃしないし……」

「えゝ。でも、それではあんまり、にいさんや、ねえさんにすみませんわ。自分だけ、かってなことをしておいて……」

「まあ、そんなことはどうでもいいよ。」

「にいさん、もう少し考えさせてくださいません。——届はもうすぐしなくっちゃいけないんですか。」

「いや、きょう、あすというほど急ぐことでもないんだ。二週間はいゝんだから。それじゃ、この次ぎくる時まで、ゆっくり考えておくさ。」

「えゝ、じゃ、そうさしてください。それまでには赤ちゃんの名まえもきめておきますわ。」

「そうしておいてくれ。だが、あんまり考えすぎて、赤ん坊に凝った名まえをつけないほうがいいぜ。小学校へあがった時、困るからな。」

兄はそんな冗談をいって帰って行った。

それから允子は、ひまにあかして名まえと籍のことを考えた。名まえは世間にざらにあるようなものじゃなくって、しかも、なるたけ画（カク）のすくない字を選びたいと思った。しかし、そんなふうに考えると、なおさら名まえがつけにくかった。

兄がきた二、三日あとの午後だった。麦角（バツカク）を主成分とした水薬を吸いのみから飲んでいると、ノックの音が聞こえた。訪ねてくるものといつては、母か兄夫婦のほかにはないはずなのに、だれがきたのかしらと思った。

看護婦がドアをあけた。やがて彼女は一枚の名刺を持ってきた。

三

允子は名刺を手にしながらかうか、会うまいかと考えていた。しかし、「あなたにはもう一生お目にかゝりません。二度と訪ねてこないでください。」といったくらいなんだから、ことわるのが当然だと思った。そこで看護婦にことわらせようと思って横を向くと、看護婦はいないで、公莊がベッドのそばに立っていた。そして看護婦は気をきかすつもりか、公莊にイスなぞ持ってきて勧めていた。允子は今さら帰れとはいえなかった。

「おめでとう。」

「……………」

「男の子だったそうだね。」

公莊はイスに腰をおろしながらいった。

允子は返事をしなかった。

気まずいものが、ふたりのあいだに流れた。

すぐ横のベビー・ベッドに寝ていた赤ん坊が、突然、泣きだした。

看護婦が走りよって、だきあげようとした。

「だいちゃだめよ。だきぐせがつくから。」

「あ、そうでしたわね。つい……………」

看護婦はふとんの上から軽く赤ん坊を揺すった。しかし赤ん坊はなかく泣きやまなかった。

「どうしてそんなに泣くんです。まだおっぱいの時間じゃありませんのよ。」

允子は赤ん坊のほうを見ながら、あやすようにいった。

「そうく。それよりも、おぶをつかわせる時間じゃありませんの。」

彼女は看護婦のほうに顔を向けた。そして、できるだけ公荘のほうを見まいとした。

「え、ちょうどそのお時間ですわ。ちよつと見てまいりましょう。」

看護婦は部屋を出て、ふろ場のほうに行つた。

赤ん坊はまだ泣いていた。

允子は動くことができないので、どうすることもできなかった。彼女と公荘とはおのくちがつた思いで、赤ん坊をながめていた。

と、公荘は急に立ちあがつて、持ってきた包みをぱりつと破いた。そしてセルロイドのガラガラをだして、赤ん坊のそばでガラく振つた。

それでも赤ん坊は泣きやめなかった。

「まだ聞こえないのかしら？」

「……………」

彼は笛をだして、ピイと鳴らした。

允子はなんだか、それを見ているのがたまらなかった。彼女はそつと寝がえりを打って壁のほうに顔を向けてしまった。

「たゞいま、ちょうどすいてますわ。」

看護婦は帰ってきて、赤ん坊をだきあげた。そして、ふろ場につれて行った。赤ん坊はだかれると、不思議なくらいすぐ泣きやんだ。

「ぼくはもっと早く訪ねてきたかったんだが、なか／＼君の居どころがわからなくてね。……」公莊はまが惡そうにぼつり／＼話した。

「あたくし。もう先生にお目にかゝる用事はなんにもないはずですわ。」

「君はそういうが、ぼくとしては、そう／＼君にばかり苦勞をかけるわけにはいかないよ。ぼくは最初の点ではまちがえたが、まちがえたとわかった以上、そのまちがいを、ほうっておくことはできない。」

「……………」

「君、赤ん坊はもうどこかへ籍をいれたのかい。」

「……………」

「君からしたら、それは、よけいなことだというかもしれないが、これから成長するものにとつては大きな問題だ。そこで、ぼくに提案があるんだけど、聞いてくれないかね。」

四

「提案というのは、ほかでもない。もしまだ籍がはいっていないのなら、あの子をぼくのほうに入れさしてもらいたいと思うのだ。」

「……………」

「それが一番順当でもあり、子どものためにもい、と思うのだが、どうだろう。ぼくのところに入れば、子どもにも傷がつかないし、また事実ぼくが父おやに相違ないのだから、扶養の義務はほくにあるのだ。そして、ぼくはその義務をつくしたいと思うのだ。」

何をかつてなことをいっているのだと、允子は腹のなかで思った。受胎した時にはおろせなんていっていながら、今度は自分が父おやだなんて、よくもそんな事がいえたものだと思った。男の子と聞いたので、急に取りたくなつたのに相違ない。虫がい、にもほどがある、と、ぷりくしながら、彼女は返事もしないで天じょうを向いていた。

「これはかなり重大な問題だから。」

公莊はつづけた。

「決してぼくの一存ではないのだ。フラウ（妻）も充分に了解していることなのだ。——話があるときになつて、なんだけれど、フラウはそこ、だいぶ健康が回復してね、このごろでは、どうやら寝たり起きたりの状態になつたのだ。それというのも、前にほつたらかしておいて、里まかせにしておいたのが、君のことがあつて以来、ぼくは非常に考えさせられたものだから、週末には、かならず看病に行つてやるようにしていたのだ。その結果というわけでもあるまいが、とにかく、このごろでは見ちがえるようによくなつてね。」

「それはおめでとうございます。」

允子は皮肉のつもりでいったのではないが、公莊はてれて、あとのことばをいうのに少しまご